

# ナウマン博士ゆかりの人と所をたずねて

## I. マイセンとドレスデン

山下 昇<sup>1)</sup>

### 1. テレビから仕事の話が来た

「フォッサマグナ」という番組。 昨年の春、テレビ信州の東平氏から電話で、「フォッサマグナ」という1時間半ほどの番組をつくるから応援してほしいという話 came. 私は元来テレビのようなものは苦手なので最初は断ったのであるが、頑強に粘られて、会うだけは会いましょうということにした。けれども、会うということ自体が負けの始まりで、断りきれなくなり、ついつい引き受けることにした。

引き受けたくなかった理由はもう一つあって、この番組制作のために私が提供できる知識の重要な部分が、実は長年調査研究を積み重ねてきて、その成果をこれから少しずつ発表しようとしているもの、いいかえると未公表のものが多かったからである。けれども、この理由はまた、逆に引き受けざるを得ない理由にもなった。というのは、自慢たらしい言い方で恐縮ではあるが、私の知識を提供しなければ、フォッサマグナやナウマン博士について間違ったことが世間に広められる心配がある。現に『フォッサ・マグナは英語で……』などというひどい間違いを書いた本が堂々と出版されている。そんなものを頼りに番組をつくったらどうなるか。これは見捨てておくわけにはいかない、という理屈である。さらに、研究者は積極的に普及活動に取り組むべきである、という私の所属する学会の方針もある。

新書版一冊分の資料を提供。 そこで、引き受けることにしたのであるが、今度は、引き受ける以上は中途半端なことはしたくない、と発展した。地質家ですらよく理解していない人があるこの問題を、多少の時間をかけたとしても、口頭で説明したのでは誤解される心配が大きい。そこで、フォッサマグナの概要およびナウマン博士の伝記や、博士のフォッサマグナ旅行記を和訳したものなどをまとめたワープロ文書を作成して東平氏に渡した。400字づつ原稿用紙にして150枚ほどである。その後また50枚ほどの文書その他も追加して渡した。だからこ

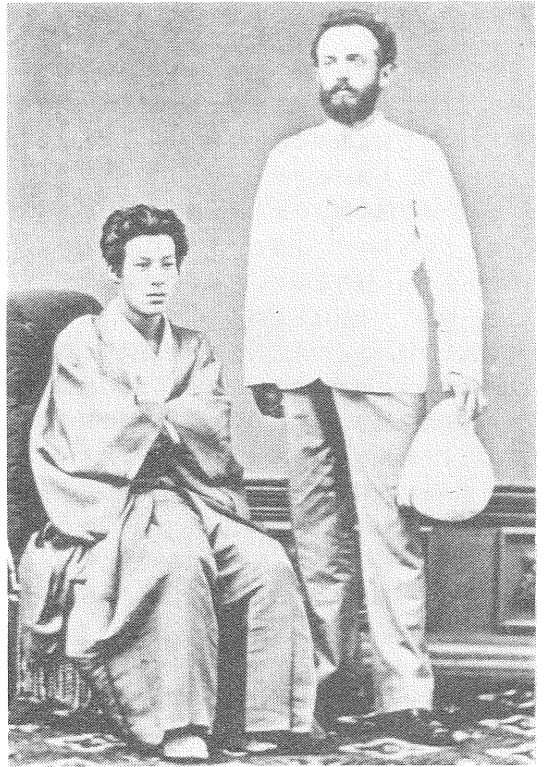


写真1 エドムント・ナウマン博士と富士谷孝雄氏

もう一枚別に日本人の単独の肖像写真があって、その裏面にはローマ字で Fujitani という署名があった。富士谷氏は1881年東大地質第三回の卒業。この写真はナウマン博士の孫にあたる D. ナウマン氏からいただいたもの。

れは優に新書版の本一冊分、あるいはそれ以上である。テレビのスタッフ諸氏は、これを増し刷りして勉強し、大いに認識を深めたという話であった。もちろん、未公表の知識がたくさん含まれているのであるから、他に流出することのないよう、繰り返し厳重に注意しておいた。

最後に裏切られた。といったような経過があって番組はできあがったわけであるが、結果は裏切られた。そ

1) 信州大学名誉教授：〒153 東京都目黒区青葉台4-2-2

キーワード：ナウマン、マイセン、ドレスデン、ザクセンのスイス

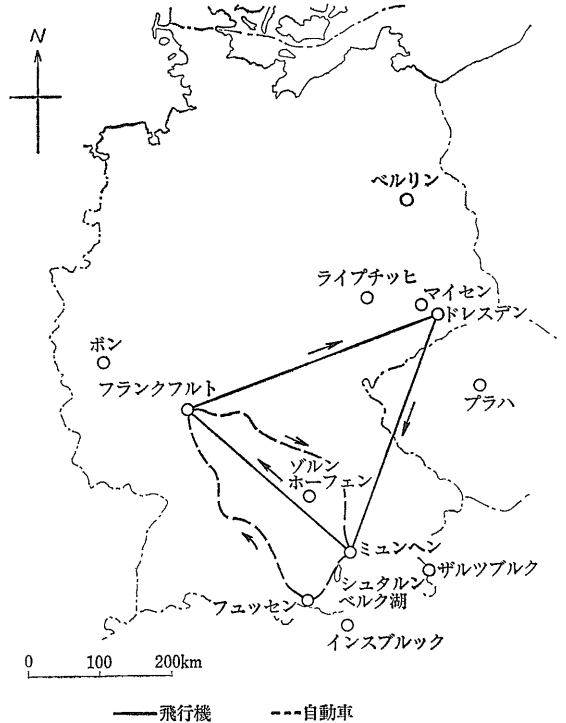
れも二重にである。まず第一は、80分ほどの番組の中で、フォッサマグナとナウマン博士のことが扱われたのは僅か10分あまりしかなかったことである。もっとも、これは「フォッサマグナという番組をつくる」というテレビ側の最初の言い分を鵜呑みにした、地質家という立場からの不満であって、あまりきつく非難するわけにはいかない。というのは、私が応援を約束したのは番組の地質学とナウマン博士に関する側面であって、番組全体をどんなふうにつくるかは、テレビ側の問題だからである。

この番組が放映された後、大勢の人から意見が寄せられたが、非常に明確に好評と不評とが分かれた。好評を下したのは主として信州の風物に興味をもった人たちであった。一方、不評派はフォッサマグナというタイトルにひかれ、地学現象およびナウマン博士に関心があった人達で、こちらからは、不評というよりは悪評といった方がよいような、随分と厳しい意見が寄せられた。

ひどい屈辱。 それはともかく、もう一つ、ひどく傷つけられたのは、多くの未公表データを提供し、地質学の側面についてこの番組の制作を指導した私の役割が、意地悪い形で無視されたことであつた。番組の終りに、制作にたずさわった人達の名前が次々と出て来る。プロデューサーという肩書の給責任者である吉田実氏から始めて、仕事を分担した人達の名が出てくる。けれども私の名前はずいになかった。しかも番組の途中では、私が顔を出して糸魚川—静岡構造線の説明をする場面があつて、その部分に限って、私の名前がスーパーインポーズされている。これではまるで、私が役に立ったのはその場面だけであつて、その他は私と関係ない、ということになるのではないか。実際、事情を知らない知人からは、そういう意見が寄せられた。

ドイツ訪問は私の資料が基で実現した。 これ以上細かいことを書いても、多くの読者には迷惑なことであろうから、結論を簡単にいうと、私は知的所有権を侵害されたのである。ある意味では私の恥づかしい屈辱をさらけ出してこんなことを公表するのは、地質家あるいは一般の皆さんが、私と同じようなひどいめに合わないように、という警鐘のつもりである。

そういう事情があるから、気分としては書きたくないことではあるが、私のドイツ訪問はこの番組制作の一環として、テレビ信州のスタッフ諸氏と共に、この会社の費用負担で行ったものである(第1図)。この点についてテレビ信州に謝意を表する次第である。しかし、テレビの諸氏がフォッサマグナとナウマン博士との関係を知り、ドイツ訪問の必要性を認識し、また訪問の場所やテーマについて計画をたてることができた基礎は、私が提



第1図 ドイツ旅行のコース

さまざまな条件が重なって、結局、フランクフルトを振り出しに、二回した。最初は自動車でフランクフルト→ミュンヘン→シュタルンベルク湖(泊)→フュッセン→フランクフルト。二回目は飛行機でフランクフルト→ドレスデン(泊)→ミュンヘン(泊)→フランクフルト、いう順であった。ただし、本文の記述は、ほぼナウマン博士の生涯をたどって、マイゼン→ドレスデン→ミュンヘン→フランクフルト、の順に進めることにする。

供した未公表の知識と資料にあつた。

## 2. キッパース氏の応援を得た

吉田尚氏の紹介でキッパース氏に会った。 ところで私のナウマン研究の現段階は、彼の主要な論文を和訳し終わり、分野ごとに彼の研究の内容紹介(地質学雑誌, 96巻, 6・7・12号)を進めているところである。これまでには当然、ナウマン博士の生涯についても調査を行い、かなりのデータを集めている。という状態の中で、元地質調査所所員で尊敬する先輩の吉田尚氏から、日本在住のドイツ人地質家について会ってみたいか、というお勧めをいただいた。そこで知り合いになったのがドイツ日本研究所(Deutsches Institut für Japanstudien)のA. N. キッパース氏(Herr Andreas N. Küppers, Diplom-Geologe)である。同氏は、私の願いに応じて快く応援してくださるこ

とになった。

ナウマン博士の孫の存在が分かった。キッパース氏から最初にいただいた資料は、1987年の秋ドイツで行われた「森鷗外展」のパンフレットのコピー（部分）であった。それを見て驚いたのは、その序文の中にミュンヘンのディーター・ナウマン氏(Herr Dipl. Ing. Dieter Nau- mann) という名があったことである。私はまた他方で、糸魚川市が進めている“フォッサマグナ博物館”（仮称）の建設にも参画しているのであるが、あるとき、その会議で「博物館の開館式にはナウマン博士の子孫を探して、出席してもらったらどうか」と発言した人があった。その話は当時はまったくの夢物語であったが、私個人としては、いつかはドイツに出かけて博士の子孫を探したいものだ、と考えていたのであるから、D. ナウマン氏の名前を発見したことは大きな驚きであった。

ナウマン博士がオペラを書いた。さらに、このパンフレットを読んでもみると、ナウマン博士と森鷗外との有名な論争のことが出ているのは当然として、そのほかにもナウマン博士の紹介として、「竹取物語」を基にして“Götterfunken”（仮に、“神々のきらめき”と訳しておく）というオペラの台本を書いている、という記事が目をついた（第2図）。

その後のキッパース氏の精力的な調査ぶりは目を見張るばかり。たちまち、さまざまな新事実を集めて下さった。その結果、D. ナウマン氏がまぎれもないナウマン博士の孫にあたること、さらに上記の序文の中にあるライアー夫人(Frau Edith Leier)もまたナウマン博士の孫であることが分かった。

ナウマン博士が受けた博士試験の問題と答案。キッパース氏の活躍の詳細は省略すると、重要な結果だけを抜き出しておく、ミュンヘン大学資料室のスマルカ氏(Herr Wolfgang J. Smolka M. A.)は、キッパース氏を通じて、ミュンヘン大学に保管されているナウマン博士に関する人事文書多数のコピーを送って下さった。そのほとんどすべては手書きの公文書で、中にはナウマン博士の履歴書や彼が受けた博士試験の問題(チャッテル教授出題)と答案(もちろんナウマン博士の手書き)も含まれている。

バイエルン国立古生物学地史学博物館(=ミュンヘン古生物学博物館)のマイヤー博士(Dr. Helmut Mayr)は、チャッテル生誕150年を記念して同博士が書いた「カルルアルフレードフォンチャッテル」という論文(同博物館の出版物)を送って下さった。その後、同博士は、ナウマン博士の博士号請求論文を中心として、私の質問に答えて、さまざまなことを教えて下さった。

ナウマン博士のお墓が見つかった。さらにキッパー

# Götterfunken.

## Operndichtung

frei nach dem altjapanischen Taketori-Monogatari

(Geschichte des Bambusfammles)

*Die ganze Schöpfung ist  
von  
Ihm belebt und gerührt  
Edmund Staumann. Amm. Tod. Leben ist  
die unerschöpfliche Quelle.  
Himm. in dem Tod. e. Leben  
Ick. ein. in. v. d. h. f. e. n. e.  
Dann wird der große Blick  
Dann wird die Welt sein  
Personen:  
Ein Künge (Hofschmied), erster Freier. Amm. Tod.  
Der Führer der Vögel.  
Der Bambusfammles.  
Iue, Kanguahime's Gespielin.  
Ein Sängler.  
Der Kaiser.  
(Mikaharunivara  
Sutra) der Buddha.*

Kanguahime. . . . . Ein Künge (Hofschmied), erster Freier. Amm. Tod.  
Der Führer der Vögel. . . . . Der Führer von Tosa, zweiter Freier. Keiljen  
Der Bambusfammles. . . . . Naiko (ein Krieger), dritter Freier. Iue Keiljen  
Iue, Kanguahime's Gespielin. . . . . Ein Sängler.  
Kamemats, Iue's Verlobter. . . . . Der Kaiser.  
Ein Wandersmann. . . . .  
Fußsji-Vögel, Landleute, Burgen und Mädchen, Edelsteinsteifer, Gefolge des Fürsten  
von Tosa, Säufentäger, Krieger, Bogenschützen, Sternweiser.

Ort der Handlung: Ein Tempelgärtlein im Gebirgslande des Fußsji.

— Als Manuskript gedruckt. —

Braunschweig a. N.

Druck von G. Adelmann.

1901.

### 第2図 ナウマン博士のオペラ作品の表紙。

書いてあることの概略は次のとおりである。「神々のきらめき」。オペラ作品。昔の日本の竹取物語(竹を取る人の物語)を基に、エドムントナウマン作。

登場人物：かぐや姫；巡礼者の長；竹取りの翁；イネ，かぐや姫の女友達；亀松：イネの婚約者；旅人；公家(宮廷の貴族)，第一の求婚者；土佐の殿様，第二の求婚者；ライコ[頼光?] (武士)，第三の求婚者；歌い手；天皇。

以下略。

ス氏から、ナウマン博士のミュンヘンにおける旧居が見つかったとか、フランクフルトにお墓があることが分かった、などという情報が次々と寄せられた。そういう中で、テレビ側も直接にキッパース氏に会い、同氏からの情報と斡旋により、ドイツ訪問の具体的日程をたてた。テレビ会社の依頼により、ドイツにおける上記の各氏との面会の時と場所、交通と宿泊等の詳細を準備したのはハイデルベルク在住の西本由美子夫人である。西本夫人はまた、通訳・ガイドとしての業務とは別に、ドイツの大学事情などについていろいろ教えて下さった。

その他ドイツにおいては、ミュンヘン古生物学博物館の館長でかつミュンヘン大学の地質学教室主任教授であるヘルム博士(Prof. Dr. Dietrich Herm)，バイエルン国

立図書館東洋部長のデュファイ博士 (Dr. Alfons Dufey), フランクフルト/マインのゲーテ大学名誉教授ムラウスキー博士 (Prof. em., Dr. Hans A. M. Murawski) にも, さまざまな御意見と御教示をいただいた。以下に報告するのは, このドイツ訪問によって得た見聞と, かねて私が続けてきたナウマン研究の結果との混合物である。この機会に, 上記の諸氏に厚く御礼申し上げたい, また, ドイツ旅行中, 老齢の筆者を助けて快適な調査研究を可能にくださったテレビ信州のスタッフ, 東平敏生・梶本昌義・菱川真一の諸氏にもお礼を申し上げます。

### 3. マイセン——ナウマン博士が生まれた町

空港前からいきなりマイセンへ走る。ドイツ西部の町フランクフルト/マインから東へ飛行機で約1時間, ドレスデンの空港に着いたのは1990年10月13日の13時20分であった。ということは, 東西ドイツの統一が実現して僅か10日後のことである。だから, よその国のことながら, 何となく緊張した感じで飛行機を降りた。小さな空港ビルを出ると, すぐ目の前に客待ちのタクシーがいる。これではとつする。

というのは, ドイツの旅に慣れている西本さんにとつても, 東独は初めてのことで, 事前には, 「タクシーもあるらしい」という程度の情報しかなかったのである。ともかく, これでひと安心。テレビの3人に西本さんと私, 合計5人のほかに, テレビカメラや大きな三脚を初め, 撮影関係の道具だけでも100kg近く抱えているのであるから, 足を確保するのが先決である。タクシー2台に荷物を積みこむとすぐにマイセンへ向けて走り出した。時間の割り振りは, 今日の午後がマイセン, 明日の

午前がドレスデンで, そのお昼の12時にはミュンヘン行きの飛行機に乗らなければならない。テレビ会社の取材旅行は, 日程がぎりぎりである。

突然エルベ河畔に出た。出発の前に東京でできるだけ地図や案内書を集めたが, 東独については1/100万程度の地図しか入手できなかった。だから, マイセンはドレスデンの北西約20kmというくらいのことしか分かっていない。第一, 出発点のドレスデン空港というのが, ドレスデンの町からどの方向へどのくらいの距離であるのかも分かっていないのだから, どこをどう走っているのかさっぱり分からない。道は黄葉し始めた広葉樹林のトンネルの中を, ただただ走る。時々小型の乗用車に出会おうが, 交通量は少ない。

30分ほど走ったところで, 突然大きな河の縁に出た (写真2)。エルベ河である。200mほど先に大きな橋があって, その橋の彼方の対岸側の丘の上に, 鋭く高くそびえる教会の尖塔が見えている。即座に車を止めて撮影開始。河は左手後方から前方へ流れている。だから, 我々はエルベ河の右岸に居るのであった。

赤い花崗岩の露頭。撮影の間, 私は暇である。道路の右側には高さ10~20mの岩壁が続いていて, 赤い岩石が露出している。絶え間なく車の走る道端であるから, 露頭は埃にまみれている。もちろんハンマーなど持っていないから, 手でなでさすり, 息で埃を吹き飛ばして確かめる。赤い (もう少し丁寧ないうと煉瓦色) 岩石だから二畳~三畳紀の砂岩だろうと思っていたのが, 何と花崗岩である。それも斑状で, 花崗斑岩といった方がよいかももしれない。だから全体としてラパーキビ花崗岩にも似ている。もちろんそうではなくて, 後で調べてみたらパリスカンすなわち古生代後期のものであった。



第3図 ドイツ統一の記念切手。

右側の小さい字は 3 OKTOBER 1990, すなわち1990年10月3日, 左の小さい字は DEUTSCHE BUNDESPOST, すなわちドイツ連邦郵便。元の大きさは枠の線で測って約39×21mm。これと同じ図柄を大きく拡大した看板を, しばしば町角などで見かけた。

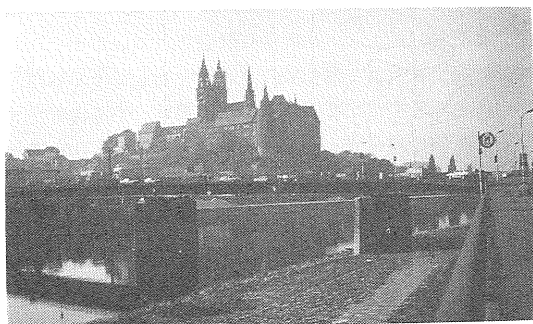


写真2 マイセンの城山

マイセンの街はエルベ河の左岸にある。右岸側 (北東側) から対岸の城山を見たところ。教会の高い尖塔が目立つが, アルプレヒツブルクという城の建物と教会とが, この丘の上の平坦面上にひしめきあっている。丘の比高は約50m。

河に河原がある。道路の反対側に渡って河を見おろすと、雑草の生えた広い河原を散歩している人たちがいる。これは珍しいことだ。ヨーロッパの河は、一般に河原がなく、岸までいっばいの水が滔々と流れているのが普通である。つまり河原があるのが珍しいのである。

カメラを構えている我々に遠慮して、小学五年生くらいの少年が立ちどまる。手まねで、どうぞ通ってちょうだいという身振りをしたら、とり違えた少年は私の横に並んで立った。そこで一枚、人なつこい子である。

城山に上る。何はともあれ、尖塔のそびえる丘に上る。大橋を渡った所から先がマイセンの市街地である。小さいけれども1000年の歴史があるという有名な町である。古い町だけに細い道は花崗岩の石だたみである。丘に近づくと道路は上り坂で、やがて中門という名の城門を通り抜けると、丘の上は小さな広場になっている。広場の奥の正面が尖塔のある教会。その左奥がアルプレヒツブルクという城の建物である。広場の回りはすべて建物で囲まれている。丘の上の平坦面の縁に沿って、連続した通路を兼ねたような建物を取り囲んでいる、というこのスタイルは、英国のドーバー城もそうであったし、日本では姫路城が同じ構造になっている。城の始まりは929年であるが、現在の建物は1500年前後に建てられたもの。教会は1260年～1410年の建築。ただし、いちばん目だつ高さ81mの尖塔は1903～1908年の建築である。その塔があいにくと修理の足場に包まれていて、きれいな写真は無理である。

城山は段丘か？ 飛行機に乗る直前、フランクフルトの町の本屋でベデカの案内書の「ドレスデン」というのを見つけて買っておいたが、その中に出ている地図によると、この丘の平面形は不等辺三角形で、三辺の長さは260m, 305m, 210mである。丘の表面はすべて舗装されているし、どこにも露頭がないので、どういう成因のものか分からないが、見た感じでは比高50mほどの段丘のように見える。丘の南麓の道路がシュロスベルクシュトラッセ、すなわち城山通りとなっているから、この丘の名は城山であるに違いない。

広場の南西端のレストランに入って通り抜けるとテラス状の展望台に出られる。丘の南に広がるマイセンの市街地は赤い屋根が印象的で、その左手のかなたにエルベ河と先程渡ってきた大橋が見える(写真3)。そこから右へ、眼下の町並みの向こうに、比高100～200mの丘陵がつづいている。町のほぼ真ん中にも教会の鐘楼が見えている。ナウマン博士一家が所属するフラウエンキルヘすなわち聖母教会である。

マイセンの磁器工場。マイセンは有名な磁器の産地である。そこで、国立磁器製造所に行ってみる。ここに

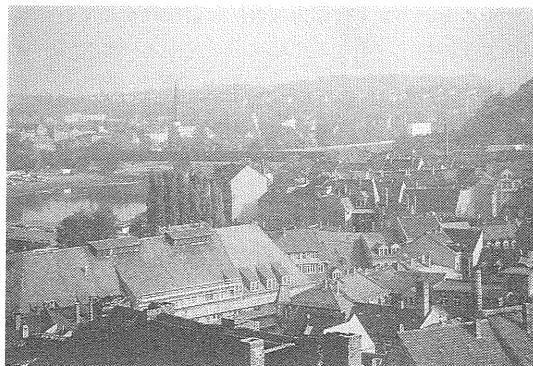


写真3 城山の展望台からマイセンの街とエルベ河

は付属の博物館があって製品が展示されているだけでなく、制作の実演を見せてくれるはずである。ところが開館時間は8.00～16.00時で、最終の入館は15.30。時計をみるとすでに15.30。残念。土曜の午後で、町の店はすべて閉まっている。たった一軒だけのマイセン磁器の店のショーウィンドウを覗く(写真4)。藍色の東洋風の絵柄が特徴らしい。値段の数字を円に換算してみると驚くほど高価である。マイセンの磁器製造は1710年に始まったというから、日本や中国の磁器製造に比べると、あまり古いものではない。



写真4 マイセン磁器の店

土曜の午後で、店は閉まっていた。

マルクトプラッツと聖母教会. 最後にマルクトプラッツすなわちマーケット広場に行ってみる(写真5). ヨーロッパの古い町のどこにでもある広場で、町の中心である。目測で100×100mほどの方形の広場で、赤い花崗岩のブロックが敷き詰められている。タクシーの運転手によると、この花崗岩はドレスデンの南30kmの石切場で採掘されているもので、赤いものと白いものがあるという。

広場の周辺にはベンチが置いてあって、老人たちが休んでいる。広場のまわりは古風な建物に囲まれている。特に目立つのは1472年に建てられた市庁舎である。切り妻形の巨大な屋根と、その屋根から突き出た三つの小屋根が珍しい形をしている(写真6)。広場の一角にはまた、城山から見えた聖母教会がある。その鐘楼には1929年に制作された大小合計37個の磁器製の鐘が7段に分けて吊るしてある。

この教会は15世紀に建てられたものであるが、多分、博士の誕生や洗礼などの記録が保存されていると推定さ

れる。けれども、土曜日の午後ではあるし、突然の訪問ではどうしようもない。

わずか半日、それもタクシーであわただしく走りまわっただけであるが、マイセンの町は戦争で破壊されることもなく、昔ながらの姿を残している。石畳の坂道は多分に旅人のさすらい心をそそるものがある。今度は数日滞在して町の細道を歩き回り、疲れたらマルクトプラッツや城山の展望台でビールを飲みたいものである。そうすれば、ナウマン博士が生まれた家だって見つかるような気がする。

#### 4. ドレスデン——ナウマン博士が少年時代に勉強した町

民宿に泊まる. マイセンの撮影を終わってドレスデンへ引き返す途中、すばらしい落日を見た。それもエルベ河のかなたへ沈む赤い太陽である。カメラの梶本氏が色温度が低いという。流石は写真のプロ、テレビのカメラには、それを補正する装置がついているらしい。けれども、こちらはフィルターなど持っていない。このあたりが写真自慢といってもアマチュアの実態である。いわれて見れば真つ赤な太陽がそれほど眩しくない。調べ



写真5 マイセンの中心、マルクトプラッツ（マーケット広場）  
広場は花崗岩のブロックで舗装されている。左手のバスは観光バス。

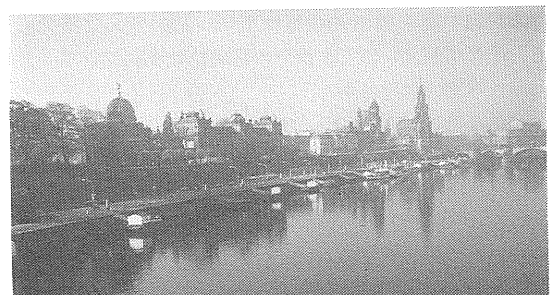


写真7 ドレスデンのエルベ河  
河の左岸側が旧市内で、こちら側に沿っては港になっている。



写真6 マーケット広場に面して建つ市庁舎の屋根

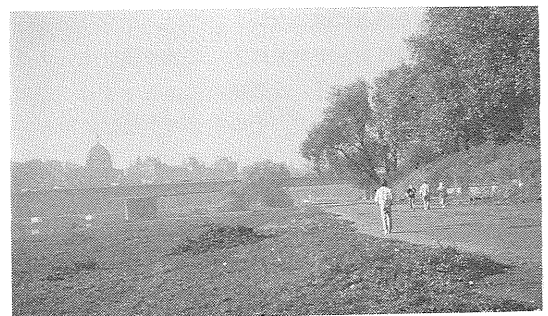


写真8 ドレスデンのエルベ河  
右岸側は広い河原で公園になっている。

てみると北緯51度、日本付近ではサハリンの真ん中かカムチャッカの南端である。

ドレスデンでは3軒の民宿に分かれて泊まった。ドイツ訪問の決定が間際になったため、普通のホテルがとれなかったのである。ドレスデンは人口52万人の大都会であるが、第二次大戦の末期、1945年2月に英米軍の大爆撃を受け、市の中心部が完全に破壊され、35,000人以上が亡くなったという。戦後の復興も遅れがちでホテルが不足している。私が泊まったのは日本にもたくさんある団地型の住宅の一つで、中年の婦人と20歳くらいの息子が住む家であった。広さや設備は日本の団地の住宅と似たようなもの。英国の民宿のB&Bと同じで、ベッドと軽い朝食だけ。

### ナウマン博士とドレスデン——1. 工業高等学校。

これまで日本にはナウマン博士、特にその個人的経歴に関する資料が極めて少なかった。だから、分からないことばかりであった。ところが、ミュンヘン大学のナウマン文書の中には博士の自筆と推定される履歴書がある。この文書には日付や署名はないが、多分1887年春にミュンヘン大学でハビリタチオン（大学教員資格）を取得し、私講師になったときに提出したものと思われる。だから日本で10年間仕事をしたことや、勲四等旭日章を受けたことなどが書いてある。

その履歴書の冒頭に、博士は1854年9月11日ザクセン国マイセンで生まれ、ドレスデンで科学的予備教育（おそらく初等教育と考えてよいのであろう）を受けた後、1870年の復活祭にドレスデン工業高等学校に入ったと書いてある。復活祭とは「春分後の満月の直後の日曜日」というのであるから、3月下旬から4月上旬のことである。この学校で5学期間、数学と自然科学を勉強した後、ミュンヘンの工業高等学校に移ったという。1学期は半年であるから2年半である。この履歴書は非常に丁寧に、いわば楷書で書いてあるが、形式は普通の書き下しの文章になっている。そこで、これを日本の履歴書風書き改めてみると、次のようになる。

姓 名	ハインリッヒ エドムント ナウマン
生年月日	1854年9月11日
出生地	ザクセン国マイセン
学 歴	
1870年春	ドレスデンで予備教育終了 [15歳]
” ”	ドレスデン工業高等学校入学
1872年秋	” ” 5学期終了 [18歳]
” ”	ミュンヘン工業高等学校へ転入学
1873年春	” ” 卒業 [18歳]

なお、工業高等学校という名称については、場合によって異なった言葉が用いられているので、この訳語を確

定的なものとは考えないでほしい。また、最後のミュンヘン工業高等学校の卒業については、「実科高等学校卒業証書」[Absolutorium des Realgymnasiums] という文書があって、これは1873年8月2日づけになっている。

ドレスデン工業大学。 さて、ドレスデンを走り回っているときは、まだここまでは詳しく調べていなかった。けれども何となく、ナウマン博士が勉強した工業高等学校が現在のドレスデン工業大学ではないか、という予想みたいなものがあったので、タクシーの運転手に大学のことを聞いてみた。ところが残念なことに、1945年の爆撃で大学もすべて破壊され、その建物は残っていないということであった。

案内書「ドレスデン」の記事によると、この大学の歴史は次のとおりである。

- 1828年 工業学校 (Technische Bildungsanstalt) が設立された。
- 1875年 工業学校が高等工業学校 (Polytechnikum) となった。
- 1890年 高等工業学校が工業高等学校 (Technische Hochschule) となった。
- 1961年 工業高等学校が工業大学 (Technische Universität) となった。

ナウマン博士に関するさまざまな文書では学校の名称がまちまちであるが、ともかく、彼が2年半在学して数学と自然科学を学んだという学校が、現在のドレスデン工業大学の前身であることは間違いない。この学校は現在（案内書は1989年版）、3,000人の教員・研究者と18,000人の学生を擁し、ドイツ東部で最大の工業大学である。

劇場広場で、町の中心に劇場広場がある。ゼンパーオペラ劇場という大きな建物の前にあるから劇場広場という（写真9）。ここも花崗岩のブロックを敷き詰めた石だたみになっている。ゼンパーとは、この建物を建てた建築家の名前であるが、これも爆撃で壊滅したものを、戦後になって復元再興したものである。案内書によると、破壊されてから40年ぶりに1985年2月13日に再開したという。建物の入口の碑文に、日本風にいえば「1977年6月24日、定礎」と書いてあるから、完成には8年近くかかっていることになる。音楽関係では有名な劇場であるらしく、先年ここを訪れたという知り合いの音楽専門家に、ここの写真スライドを贈呈したところ大変喜ばれた。

テレビ組は、ここにやって来る人をつかまえては、「地質家のナウマン博士を御存知ですか？」というインタビューをやっているが、ついに誰一人知っている人は現れなかった。広場の一角には小さな露天式の絵葉書屋が店を出している。観光バスが着くたびにひとしきり人に囲



写真9 ドレスデンの中心にあるゼンパーオペラ劇場  
第二次大戦末期の1945年2月13-14日、英米軍の爆撃  
で完全に破壊されたが、元のとおりにより復元された。

まれるが、それが過ぎると誰もいなくなる。そこをねらって近づくと、英語のパンフもあるよ、とあれこれ勧めてくれる。日本人にはドイツ語はだめだと知っているらしい。ここで初めてドレスデンの市街地図を手に入れ、念のため「ザクセンのスイス」の案内書はないかと尋ねると、案内書はないがカレンダーがあるという。

ザクセンのスイスとは。ザクセンのスイスはドイツ語で *sächsische Schweiz* と書き、ゼヒジッシェシュヴァイツと読む。ゼヒジッシェはザクセンの形容詞である。だからザクセンのシュヴァイツなのだが、シュヴァイツは日本ではスイスである。ところがスイスはフランス語なのだからザクセンスイスと訳すると独仏混合になってしまう。こんなことを書くのは照れ臭いが、実は翻訳の仕事で大変苦しむ問題の一つである。この地名の訳を何とするか、いまだに決めかねているので、内実を白状しておくわけである。

この奇妙な地名をなぜ知っているかという点、実はナウマン博士の最も重要な論文である「日本群島の構造と起源について」(1885)の中にこれが出て来る(55ページ, 31行)。小豆島の火山噴出物、特に寒霞渓の風景が「ザクセンのスイス」に似ているというのである。この地名がどこにあるか、さんざん探しまわって、ようやくドレスデンの南方にあることを突き止めたのは数年前であったが、今度はその地質が分からない。ドイツ語の原文を日本語に変えるだけなら簡単なことであるが、地質家が地質の論文を翻訳して、言葉の地質的内容は分かりませんでは恥ずかしい、というわけで、大変気になっていたのが、図らずも案内書「ドレスデン」と劇場広場で入手したカレンダーによって判明した。

「ザクセンのスイス」はドレスデンの市街の南東30~50 kmの地域で、エルベ河の両岸に独特な峡谷をつくっ



写真10 ツヴィンガーの王冠門  
ゼンパーオペラ劇場の隣にツヴィンガーという宮殿—博物館—美術館がある。これも1945年2月13-14日の「恐怖の夜」に破壊されたが、美しく復元されている。

ている。高さは海拔400~500mくらいであるから、大したことはない。岩石は「エルベ砂岩層」と呼ばれる白亜系の砂岩で、国境を越えてチェコ領まで広がっている。今回は現地を見る時間がなかったが、写真で見るとかなり粗粒であり、礫質のように見える。地層はほとんど水平であるが、多数の垂直の割れ目が発達し、このためほとんど垂直の塔のような峰が無数にできている。そのうち岩登りの対象になっているピークが970、ルートは7000もあるというから、まさに岩登りのメッカである。高山の岩場と違って、ハイウェイの傍らからいきなり高度なテクニクを要する岩登りができるというのが人気の原因らしい。

ナウマン博士とドレスデン——2. “御前講演”。ナウマン博士は10年間の日本滞在の後、1885年の夏にドイツへ帰った。その後しばらくは定職につくことなく、ヴァーンやロンドンへ出かけては日本の地質と地質調査事業、あるいは日本事情を紹介する講演を行ったりしていた。その一つがドレスデンにおける1886年4月28~30日の第六回ドイツ地理学者大会での講演で、「日本の地形・地質に関するわが国土調査について」というのがその題目であった。これは僅か15ページの短い論文であるが、その中で初めてフォッサマグナという名称が出て来る、



という点で重要なものである。その他にも、彼が行った地形・地質の調査の方法について、たとえば「距離の測定には、私はいつも量程車を利用した。それが利用できないときには、ストップウォッチを用いるのがよい」とか、「人の往来する道路沿いのステーションの高さは水銀気圧計とアネロイド気圧計を用いて測定した」などと、きわめて具体的なことを書いている。

それはともかく、この論文の末尾には編集者(?)の付記として、「この講演の終了後、万歳三唱の中、国王陛下とゲオルク王子殿下とは、大会議場から退席され、少時の休憩の後、会議が再開された。」と書いてある。つまり、この講演は国王臨席のもとでの“御前講演”であったわけで、ナウマン博士にとっては大変な名誉であったに違いない。

ナウマン博士の講演会に森鷗外が出席した。その御前講演よりしばらく前の3月6日、彼はドレスデンの地学協会において「日本」という講演を行った。その講演会に森鷗外が出席した。すなわち、「独逸日記」の1886年3月6日のところに、

「夜地学協会の招に応じ、其年祭に赴く。此夜の式場演説は日本と云ふ題号にて、其演者はナウマン Edmund Naumann なり。此人久しく日本に在りて、旭日章を佩びて郷に帰りしが、何故にか頗る不平の色あり、今三百人余の男女の聴衆に対して、日本の地勢風俗政治技芸を説く。其間不穩の言少からず……」とある。

これが、鷗外ファンの間では有名なナウマン博士と森鷗外との論争の発端であった。

なお、鷗外が聞いたというナウマン博士の講演は第六回ドイツ地理学者大会である、とこれまで私は思いこんでいた。ところが最近、前筑波大学教授の佐藤正博士と同地球科学系の川田多加美さんの応援によって、それらが別の会であったことが判明した。お二人の御援助に感謝の意を表したい。(以下次回)

---

YAMASHITA Noboru (1991): Visits to Relations and Surrounding Places of Dr. Edmund Naumann I. meissen and Dresden

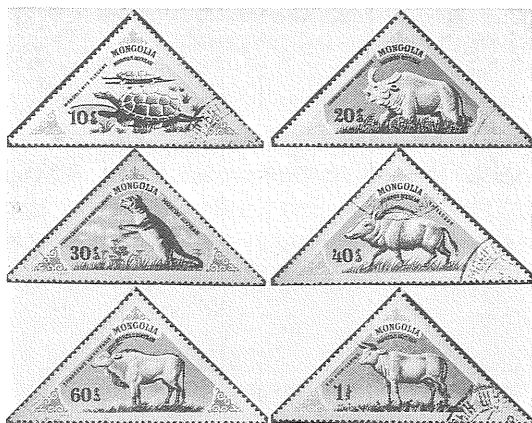
---

<受付: 1991年5月15日>

## 地学と切手

### 蒙古人民共和国の古生物切手

蒙古のゴビ砂漠には、中生代末から新生代にかけての陸成層が分布して、恐龍を初めとする脊椎動物の宝庫である。1919年からのアメリカ自然史博物館のアンドリュースから始めて、1946年からのソ連科学アカデミーの調査(エフレーモフ・ロジジェストヴェンスキー)、1963年からのポーランド・モンゴル共同調査などがよく知られている。モンゴルは1967年にも8種からなる古生物切手を発行し、本誌192号にも紹介されたが、今回は、7種からなる1977年発行の古生物切手である。80mは省略。



10m *Mongolemys elegans* 初期の陸亀の一種。

20m *Enbolotherium ergilierse* 雷獣類進化の頂点として蒙古に産するもの。最初はオスボーンがE. andrewsiと命名。漸新統に産し、体長4mを越し、鼻上の一对の角は基部でくっついてヘラ状となっている。

30m *Psittacosaurus mongoliens* 恐龍の鳥盤目の進化の最終段階として、かものはし恐龍と並ぶもの、体長約1.5mで、クチバシの様な鼻孔部を備えた小型の恐龍だった。白亜紀後期。

40m *Entelodon* 絶滅した偶蹄類エンテロドン類に属し、漸新統から産し、ヨーロッパに多い。頭骨は長く1m以上に達し、臼歯のすり減り方から、左右方向にそしゃく運動をしていた。

60m *Spirocerus kiakhtensis* 鮮新世—更新世にかけて主にアジアに住んだ。偶蹄目 ウシ上科、アンティロカブラ科の一員で、かもしかの仲間。

80m *Hipparion* ウマの一属、中期中新世に北米で出現し、ベーリング海を通してアジアに渡った。アフリカでは更新世まで続いたが、鮮新世で絶滅。

1t *Bos primigenius* 更新世及びそれ以後に生息した巨大なウシで、1627に絶滅したばかり。旧石器人の狩の対象だった。(P. Q.)